

## 言語という秘蹟 — 詩人E.E.カミングズの創造的企投 —

門脇 道雄

形象詩 (shape poetry) は視覚によって受けとめられる作品文学であり、見られる詩 (visual poetry) としてひとつの世界 (cosmos) を生成している。連や文字の数列的な配列や大文字化 (capitalization) によって統語されるある種の統語法 (syntax) を内包しているゆえに、通常の意味 (semantics) を超えた世界が生成される。形象を志向する言語芸術 (word art) としての詩は、美術の領域へと踏み込んで現成した新たな領域の詩と言える。

E. E. カミングズ Edward Estlin Cummings (1894—1962) による植字術 (typography) は、形象詩へと志向される方略であり、語や語順のねじれ (distortion) と分離 (separation) はその方略として現れる表象である。詩作品における連 (stanza) は形象詩への志向によって意図されたものとなり、4 行以上のひとつのまとまりを表す伝統的な連の概念は棄て去られている。そこでは、文字だけではなく、句読点 (punctuation mark) でさえ、視覚に訴えるものとして機能する。括弧 (parenthesis) もまた、挿入語句を括るという機能を発揮するだけではなく、形象として見られるものでありうる。慣習的な統語法を超える新たな統語法なるものが作品を生成する原理となり、そこに認められるある種の法則とは混沌 (chaos) から秩序 (cosmos) へと向かう原理である。こうして、世界は創成される。それは、何ゆえなのか、という問いをも超越する。世界は創成されゆくためにある界であるからだ。

言語による芸術は、その言語に特有の原理によって生成されている。したがって、ある言語によって生成される作品が他の言語にそのまま移し替えられることはありえない。しかしながら、ともあれ翻訳という過程及びその結果は存在する。その営為において結実するのは、原作に触れうる新たな世界の創造と考えることも可能と言える。

n

ot eth

eold almos

tladyf eebly

hurl ing

cr u

mb

son ebyo

neatt wothre

efourfi ve&amp;six

engli shsp

arr ow

s

(from *95 Poems*)

not と読み始めると、後が続かない。途中で son, on, at など既成の語を読み取ってしまっても、解読はできない。深層というよりは表層構造をまず捉えなければ、作品の像は浮かび上がってはこない。しかしながら、謎解きにも似た読解は、実は数理によってつまびらかに示されている。

全体像においては、 $1 \cdot 5 \cdot 1 \cdot 5 \cdot 1$  行と配列される連の構成にまず相称 (symmetry) がある。それに、奇数連における  $1 \cdot 2 \cdot 1$  字という行構成、空きマスも 1 字と数えるとして、偶数連の第 2 連における  $6 \cdot 10 \cdot 12 \cdot 8 \cdot 4$  字、及び第 4 連における  $8 \cdot 12 \cdot 14 \cdot 10 \cdot 6$  字という山なりのような偶数字数による盛り上がりにもある種の相称が見て取れる。それに細部を眺め

れば、この詩篇はある種の法則によって生成されていることがわかる。空きマス及び改連によって、アルファベットの語群は1からの整数の序列によって分けられているからだ。すなわち、1・2・3・4・5・6・5・4・3・2・1・2・3・4・5・6・7・6・5・4・3・2・1字というように。そのように配列される前にあった元の語群は、次のようなものと推察される。

note the old almost lady feebly hurling crumbs one by one at two  
three four five & six english sparrows

注

目あ

れ、老貴

婦人が弱々し

くパン屑

を投

げつ

けてい

る、二、三、

四、五、六羽の英国

すずめに、ひ

とつず

つ

老貴婦人が、晩秋のある晴れた日に、六羽のすずめに餌を施している。弱々しくも餌を投げかける仕草に、彼女の生き物を気遣う思いやりが窺える。よくあることなのであろう。野生の鳥がひとに慣れ親しんでいるからだ。慈しみに

あふれた配慮は、彼女の人生そのものを物語るだろう。生あるものが他の生あるものに気を配る。対他存在としての生命は、ひとばかりではなく、こうして鳥とさえ共存していく。老貴婦人が生きた人生は、内省のうちにある。誰のせいでもなく立ち現れた世界の創成に、気づくのは晩秋の、つまり人生の実りある時間のあとに振り返られる幻像である。

パズル詩(puzzle poetry)とも考えられる形象詩が、ここにある。形象に力点が置かれるため、語が伝える通常の意味がパズルのように隠されているからだ。六羽のすずめは、次の作品にも見受けられる。

24

dim

i

nu

tiv

e this park is e

mpty(everyb

ody's elsewher

e except me 6 e

nglish sparrow

s)a

utumn & t

he rai

n

th

e

raintherain

4・4・4・4 行と均等に配列される連の構成に統一がある。中央の第2・3連が盛り上がっているほかは、特別な仕掛けはないように思われる。しかしながら、語の切断によって小文字のみで構成される全体像には、ある種の形象が浮かび上がってくる。たとえば、天空から眺められる人文字のありようである。それぞれのアルファベットは人っ子のように点在していて、有機的なつながりはあまり見受けられないが、見慣れた語群が見つかってくる this park、except me、the rain。それに、切断されてはいるが 6 english sparrows、autum。それらは内容語( content word )ゆえに視界に浮かび上がる語群である。そして、diminutive ( 小形の、ちっぽけな ) empty ( 空虚な；何もない ) という形容詞が、情景を彩っている。

4つの e によって四隅を占める第2連は、ここにある小さな四角の公園の形象を表しているかのようだ。詩篇53とは対照的に、この詩篇は雨の情景を映し出している。雨降りの公園はもの哀しい。ふつう雨の日に公園を訪れるひとはいないからだ。しかし、それだけいっそう穏やかな平安に包まれているだろう。不在の空間が雨に打たれてみずみずしい。

誰もがどこかで別の世界を生きている。六羽のすずめとわたしだけがこの小さな公園に佇んでいて、穏やかだ。内省そのものの表出が、ここにある。空虚な公園には、何もないのではない。内省という豊饒な物思いが静かに満ちてゆく。もとよりなかった人生が、わき起こってきたように。

ち  
い  
さ  
な

この公園は  
からっぽで  
( 六羽のすずめ

とわたし

のほかだれもが

どこかに)

秋

そして雨

に

雨

に

雨

すずめとわたしはこの世に現れ出たひとつの秘蹟である。言語による創成がそうであるように、生物の誕生もまた誰のせいでもないひとつの世界を志向する。なぜ、わたしと六羽のすずめは、いまここにあるのか。その問いに答えるべき創造主の声はどこからも聞こえてはこない。存在者はみな、存在理由を免責された宇宙のなかで、志向すること自体が生存の証となるだろう。したがって、問いは答えられることなく、世界に響きわたる。問うこと自体が生きていることそのものであるかのように。

老貴婦人もまた、生まれでたこの世の秘蹟を秋の陽射しのように浴びている。振り返らずとも、人生のいっさいはそこにある、光ある窓辺に。小文字のように、ひっそりと人生は過ぎゆく。

52

why

do the

fingers

of the lit  
tle once beau  
tiful la

dy( sitting sew  
ing at an o  
pen window this  
fine morning )fly

instead of dancing  
are they possibly  
afraid that life is  
running away from  
them( i wonder )or

isn't she a  
ware that life( who  
never grows old )  
is always beau

tiful and  
that nobod  
y beauti

ful ev  
er hur

ries

( from *95 Poems* )

1・2・3・4・5・4・3・2・1行と配列される連の構成に統一がある。  
2度現れる life（人生、生命）という多義語とともに、行数が中央の5行連まで盛り上がる構成には、豊かな内省が込められているように思われる。詩篇52同様、始められ終えられゆく人生、すなわち高揚し収束していく人生の一部始終、が形象として表されているかのようだ。人生が一幅の絵として、熟成した生命の情景として、ここに示されている。

な

ぜち

いさく

てかつて

うつくしか

った貴婦人の

指は（すみきつ

た朝のひらかれた

窓辺に縫いものをし

ながらたたずみ）おど

りはねるかわりに飛んで

いってしまうのか彼方に生

命が走り去っていくとでもお

それているのだろうかそれ

とも気づいていないのだ

ろうか生命は（老いる

のではなく）つねに

うつくしいという

ことそれにうつ

くしいひとは  
けっして急  
ぐ必要な

どない  
のだ

と

縫いものをしている十本の指は、穏やかな時間の波を漕いでいる。公園に佇むことと同じように、その穏やかな営為はかつてあった時間を呼び起こしている。穏やかなひとときにこそ不意に、問いはわき起こる。なぜ人生は過ぎ去るのか。そのとき、現在を越えていってしまうかのように、指は躍動する作業過程から逸れ、滑っていってしまう。

生命は、いまここにある。朝の陽射しがそうであるように、進みゆく生命は美しい。志向する存在であるときに、時間は超越されてある。急ぐことはない。いまここにある陽射しがそうであるように、今あるままで生命は永遠にとどまるのだ。

次の詩篇もまた世界内存在が時空間を生きるありようを顕しており、存在原理が比喻によって浮き彫りにされている。

9

now is a ship

which captain am  
sails out of sleep

steering for dream

(from 73 Poems)

1・2・1行という連構成に相称がある。どの語も分断されてはいないばかりか、一行が四音節のリズムで統一されている。また、ship と sleep、sleep と dreamには、懸濁韻ともいうべき脚韻すら認められる。そればかりではない。am と dream には、am という視覚的脚韻が認められる。また、ship、sails、sleep、steering における s の無声音が鋭利に波しぶきをあげて時間という海を切り裂いていくような音韻的効果もまた認められる。音声体系(phonetics)は一幅の絵に秘められた時間である。宇宙にある時間性は進むことによるのみ立ち現れるように、絵は音楽的時間をも進みゆく。

関係代名詞 which は、a ship which i am captain of と a ship which sails out of sleep のふたつの節を従えていると考えられる。前者において、i と of が省略され、am と captain が倒置されているのは、四音節への統一と視覚的脚韻への志向による。

今は船

船長はわたし

眠りから漕ぎ出て

夢へと向かう

過去から未来へと進む船がある。それは現在という名の船である。船は漕ぎ手がいなければ進むことはできない。船長はむろん、わたしである。現存在は本来的時間性を生きる存在であることが、〈船〉〈船長〉という比喩によって語られる。船は、眠りから目覚めて、夢へと向かう。人生はひとつの夢であることを、そして夢の創成にこそ現存在の存在理由があることを、この一幅の詩篇は教えてくれる。

船はどこからやって来て、どこへと進むのか。過去からやってきて未来へと

進むにせよ、時間の波を漕ぎゆく船は何ゆえに出現したのか。世界はひとつの夢である。船は問いをかかえながら、なおも時間の波を漕ぎゆくだろう。眠りは夢を創成する。活動を休める眠りは、来るべき将来の躍動の相へと存在を導くだろう。存在はいまあるがままで世界を生成する。次の詩篇が語るのは、その道理である。

19

un( bee )mo

vi

n( in )g

are( th

e )you( o

nly )

as( rose )eep

( from 95 Poems )

形象における均整美はこの詩篇にも認められる。1・5・1行という連構成に相称がある。括弧のつけ方にもまた、相称が認められる。un( bee )mo には左右に2個のアルファベットを置き、n( in )g には左右に1個のアルファベットを置き、as( rose )eep には左右に3個のアルファベットを置いている。すなわち、括弧で区切ると、2・3・2字、1・2・1字、3・4・3字という相称が見て取れる。また、e )you( o には括弧の外側に you が置かれていて、1・3・1字という相称も見られる。つまり、蜂が薔薇にくるまれるように、語が内側と外側に括弧にくるまれてある。

括弧でくくられた語句を取り出せば、bee in the only rose と、unmoving are you asleep のふたつのフレーズが浮かび上がってくる。

うご（蜂）かず

に（  
がた）あなたは（だひ  
とつのなかに）  
ねむ  
って

い（薔薇）る

薔薇はひとつの夢の形象である。蜂が棲息するのは、この薔薇という小宇宙においてであり、棲息しながら生成する時空間のなかに眠っている。この世に生まれ出たことが神秘である。それよりもっと不思議なのは、薔薇という小宇宙があることであり、小宇宙を創成する存在者の志向がこの世にあるという一事である。

次の詩篇は、生成される世界の秘蹟へと向かっている。

3

seeker of truth

follow no path

all paths lead where

truth is here

(from 73 Poems)

1・2・1行という連構成に相称がある。truth と path、where と here による脚韻、それに4・4・4・3音節という行構成に、音韻における統一美が認められる。最終行のみ3音節であるのは、次なる1音節に余韻を残すため

あると考えられる。

真理を求める者よ

かつての道を辿るなかれ  
すべての道は通じている

真理のあるところへと

生成されゆく現在にこそ、世界は立ち現れる。過去は過ぎ去って、もはやないもの。かつて真実があったとしても、そこへと志向する術はない。実存するとは、未知の世界へと踏み出すことであり、つねに未踏の道を切り拓いていくことであるからだ。歩むことによって真理へと辿り着き、辿り着いたあとにまた真理を求める旅が再開されゆく。真理はすでにある、志向するひとのありように。

神秘とは、すずめがいて蜂がいてわたしがいることであり、世界があるそのことである。雪が世界の神秘に彩りを添える。カミングズの詩群に通奏低音のように鳴り響くのは、沈黙の音であり、情景のおだやかさであり、雪が奏でるメロディーである。次の詩篇のように。

6.

ㄥ

these out of in  
finite no  
where,who;arrive s  
trollingly

:alight whitely and.

)now  
flakes:are;guests,of t  
wi  
ligh  
t

(from *Late Poems*)

1・4・1・4・1 行という連構成に相称がある。句読点の付け方にもある種の法則が見られ、括弧外のフレーズにおいては〈 ; ; , 〉のように、括弧内のフレーズにおいては逆に〈 , ; ; . 〉という連鎖がある。句読点の連鎖がひらひらと舞い降りる雪のかけらを示している。〈 , ; ; , ; ; , 〉と葉が震えるさまを表した詩篇 66 (from *73 poems*)のように<sup>(1)</sup>、句読点による躍動的なダンスがここに見られる。句読点は象を表すマークでもあったのだ。また、括弧外のフレーズは句読点によって2・1・1・2語と分断されており、括弧内のフレーズにおいては5語のあと1・2・3語と分断され、最後にピリオド〈.〉で括られている 次のように。

snow flakes:are;guests,of twilight  
( these out of infinite nowhere,who;arrive strollingy:alight whitely and. )

雪〈

どことない無  
限の彼方からや  
って来てただよ  
い白く輝いて

たどりつく

)の  
かけらは  
黄昏の  
招き

人

snow (雪) はnow (今) を内包していることが第4連第1行に明示されている。それは、詩篇41 (from 95 poems) などにも見られた手法である<sup>(2)</sup>。カミングズが見ようとしているのは、雪という形象を帯びてこの宇宙に現出した存在の現れであり、存在する現象の美しさである。

世界は漂い現れる相をつねに志向している。黄昏へと招かれる雪もまた、この世に迷い出たものたちへの祝祭の舞いを舞っている。誰のせいでもなく存在するものの、志向するありようへの讃歌が、ここにある。雪のかけらが美しく輝くのは、そのせいだ。

存在の形象への驚嘆と賛美は、次の詩篇にも認められる。

50

!

α(rounD)moon,how  
do  
you(rouNd  
er  
than roUnd)float;  
who  
lly &(rOunder than)  
go

:Idenly( Round  
est )

?

( from 95 Poems )

感嘆符〈!〉と疑問符〈?〉が独立した連となって、1・10・1行による連構成となっている。round(丸い)という語には大文字化( capitalization )という仕掛けが施されており、rouND—rouNd—roUnd—rOund—Round と大文字が最後尾から先頭へと躍り出る。そして、この形容詞は原級( round ) 比較級( rounder ) 最上級( roundest )へと進展している。符号もまた、進みゆく。〈!〉から〈〉〈;〉〈:〉、そして〈?〉へと。

地の語句と括弧内の語句を分けると、伝達される語義が次のように浮かび上がってくる。

! o moon, how do you float; wholly & goldenly?  
(rouND) (rouNder than roUnd) (rOunder than (Roundest))

!  
ま あ る  
い 月 ど う  
し て ( ま る  
く ) 浮 か ん で  
い る ( ま る よ り  
ま る く ) す っ か  
り ( ま ん ま る  
よ り ) 黄 金  
色 に ( ま  
る く )  
?

世界は驚嘆から問いへと移りゆく。世界はふたたび、問いから驚嘆へと揺れ動くにちがいない。世界はいわば、驚嘆から問いへ、問いから驚嘆へのうちに生成される界である。現存在が夢見る世界は進みゆく。答を出す暇もなく繰り出される問いと驚嘆こそが、世界を彩っているにちがいない。いっさいは過ぎゆく風景である。死に向かって覚悟を定めるとき、世界は夢のように過ぎ去る驚嘆と問いとで構成されているからだ。夢は引き継がれるだろう。〈!〉から〈?〉へ、そしてまた〈?〉から〈!〉へと。

丸いという形象が神秘であるならば、浮かんでいることもまた神秘であり、月があるということ自体が神秘である。神秘への驚嘆と問いは、〈!〉と〈?〉によって示される。感嘆文としてはこれ以上簡潔にはなりえず、疑問文としてはこれ以上簡潔にはなりえないスタイルで示され、一連として独立している〈!〉はあらゆる感嘆を、〈?〉はあらゆる問いを内包している。そもそも語群が省略されているからだ。

円らな形象は、次の詩篇に受け継がれる。

81

here's s

omething round( & so

mething lost )& som

ething like

a mind with

out a body( turn

ing silently to a

lmost )dis

appearing

how patiently be

coming some( &

merciful  
ly which is  
every un( star  
rain snow moon  
dream wing tree  
leaf bird  
sun  
& singing & )  
thing found

one old blue wheel in a pasture  
( from 95 Poems )

1・9・1・9・1行という連構成に相称がある。また、第4連の括弧のなかには、カミングズの詩群に頻出するキーワードが列挙されている star  
rain snow moon dream wing tree leaf bird sun。

ここに見

つかった  
何かしら円ら  
なもの(失われ  
た)肉体のない  
心のような  
もの(音も  
なく変わりゆく)  
消え去り  
辛抱強く

無用の

ものへと  
(ほとんど  
幸いなことに 星  
雨 雪 月  
夢 翼 木  
葉 鳥  
太陽  
囀り へと)  
変容していった

#### 牧場のなかのひとつの青い車輪

牧場に置かれたひとつの青い車輪が、この詩篇の中心事物である。道具存在はこの宇宙では具体的な意味を持っており、事物としての存在は鮮やかに眼に映る。車輪は荷物を運搬する荷車という有用なるもののパーツとして、この世にある。荷車についているかぎり、その存在理由は明らかである。しかしながら、パーツとして機能せず、単独で置かれている道具存在がここにある。役目を終えた車輪は、役目を終えたひとの人生の比喩である。カミングズは、道具存在への配慮も忘れない。この宇宙では、存在するものがみな、通り過ぎてゆく幻像であるからだ。

詩篇のなかの something という語の some は、s/ome -so/me som/e と移りゆき、some と実体を整えようとしたときにあとに続くべき thing は unthing と暗転する。something(有用なもの)から something(無用なもの)へと変容した車輪に見るのは、存在するものすべての終末の姿である。かつて牧場を駆け抜けた車輪の記憶が、ここにある。かつて美しかった老貴婦人が、人生を駆け抜けたように。

星・雨・雪・月は、地球の滅亡までには不変的にあるように思われる。木や葉も、環境が破壊されないうちは、恒久の時間を生きるであろう。しかしなが

ら、鳥がそうであるように、ひともまた個体としての生命を閉じるときがやってくる。ものみなそうであるように、生き物はすべて任務を終えるときがやってくるのだ。したがって、body（肉体）は失われても、mind（心）のような実体のないものこそが、永遠を生き延びうるだろう。鳥が囀りを残した事実は消せようがない。同じように、ひとが夢みた事実をも。具象から抽象へと変容する神秘が、青色の色彩を伴っていまここにある車輪に秘められている。神秘とはまた、そのことである。

存在への讃歌がここにある。誰のせいでもなくわき起こった存在に寄せられるべきものは気遣いであることを、詩篇が伝えてやまない。世界があるという一事が神秘である。E.E.カミングズによる創造的企投とは、現存在が宇宙にあるという神秘への問いかけであると同時に、存在へと寄せる配慮が織り成す営為そのものの体现である。

### 【原文の詩篇と訳文について】

本論に提示された作品は、*E.E.CUMMINGS COMPLETE POEMS 1904-1962* Edited by George J. Firmage, Liveright, 1991 より引用。日本語への訳出はすべて筆者による。

### 【注】

- (1) 門脇道雄「美、あるいは規範からの飛翔 詩人E.E.カミングズの言語世界」『東北公益文科大学総合研究論集第10号』東北公益文科大学、2006年。pp.43-45
- (2) 同前、pp.45-47

### 【参考文献】

*E.E.CUMMINGS COMPLETE POEMS 1904-1962* Edited by George J. Firmage, Liveright, 1991  
藤富保男編『カミングズ詩集』思潮社、1997年。